

審査講評

山下裕二（美術評論家・明治学院大学教授）

最優秀賞を受賞した仁田原誠さんの「夢を運ぶ空の下で」という作品は、予備審査の段階から私がもっとも高く評価していた作品である。「かつて家があった場所には塀だけが残り、杭で区切られてた土地が静かに広がっていた。その風景を前にしたとき、場所は失われても、そこにあった時間や感覚は自分の中に残り続けていることを強く意識した。本作では、学校帰りに朝顔の植木鉢を抱えて歩いていた子どもの頃の記憶をもとに、一つの風景を構成している。」と作者が言うこの作品は、極めてユニークな技法によって構成されている。銅版を切り抜き、オルゴールの箱を開けたような形の支持体をつくる。その上に油彩で描くが、部分的には金属の地肌が現れている。その結果、これまで私がまったく見たことがない、独創的な作品が産み出された。他の審査員の方々も、この作品を最優秀賞とすることに賛同して下さったことを喜ばしく思う。

優秀賞を受賞した山内康嗣さんの「追想-MATSUGAURA-ウラボンエ（お盆）篇」もまた、私が高く評価した作品である。この作品もまた仁田原さんの場合と同様に、失われた風景の記憶を絵画化したもの。なんと、実家にあった砂を絵具に混ぜ込んで描いているという。いまひとつの優秀賞、松田菜優子さんの「レインコート。」は、作品単体としては私はあまり評価できなかったが、ポートフォリオに収められた他の作品を見て、将来性を考慮して優秀賞とすることに賛同した。

私の個人賞とした鷺野愛未さんの「静謐の止まり木」という作品は、近年私が注視してきた超絶技巧的な工芸作品として高く評価した。きわめてリアルに再現された雀の羽毛は、柎、櫟、黒檀、チーク、マホガニーなど、なんと18種もの天然木が用いられている。台座の造形も手が込んでいる。この作者の他の作品もぜひ実見したいと思った。

他にも受賞は叶わなかったが、植田濂さん、青柳友也さん、くどうゆうだいさんなどの作品は、高く評価すべきだと思ったことを付言しておきたい。

現代アートのコムペは数多あれども、応募者は主催者趣旨に沿うことが必要である。本公募展の趣旨は「より強く人に響く、確固たる独自の力を持った作品」と「ひとときわ輝く感性を見出すことで、これからの未来を歩んでいく作家」を求めている。一次審査通過作品はこの趣旨に合致している。副賞として東京とNYでの企画展出品機会もあり、作品販売にも寄与することが望まれる。個展開催となると、最低10点の高質作品を制作できる実力も試されているといえる。

一次の画像審査を経た最終審査は、実際に作品を見ながらであり、画像審査とは違う見極めを要する。一堂に並べた時に他作に負けないインパクト、個性、強度があるか？そしてポートフォリオを拝見し、これまでの作品、現在の立ち位置、将来性、顧客を魅了できるかなどへも思いを馳せた審査であった。

仁田原誠の「最優秀賞」受賞作品は、銅板で形成された箱が開き、そこに朝顔を持ち帰る児童が入り込む様子が描かれている。その素材と構成力、物語性の独自世界の創出には審査員の満場一致が得られた。次に得票したのが山内康嗣の「優秀賞」受賞作品である。以前から彼の名画をアレンジした作品に注目していたが、本作は実家の砂を混ぜたアクリル画で、実家周辺の記憶（見えるもの/見えないもの）を表現した意欲作である。次に「優秀賞」を競ったのが松田菜優子と矢島史織である。松田の作品は綿布にアクリルのステイニング技法で滲みを活かし、心理的境界のあいまいさを描き将来性が期待される。「審査員特別賞」となった矢島史織の作品は「子供の脳内は森である」という子育てで得た心情を岩絵具で繊細に表現し秀逸である。受賞作品以外にも今後に期待できる作品が多数あった。

言いようがない不穏な時代に突入している。冷戦の時代に生まれた筆者にとって、予想もしないかたちで、いま社会の底が抜け、世界の輪郭が壊れていく。公募の受賞作からは、そうした足場が崩れていくような感覚を受けとった。

仁田原誠は、場所の喪失を描いた作品である。作家は意図していないだろうが、津波に襲われた被災地のあちこちで目撃した風景を想起させる。廃墟の街では、電柱だけがいち早く再建されていた。そして地盤が沈下し、午後になると、冠水が発生する。山内康嗣の作品も、実家の記憶を作品化しながら、急速に失われる原風景に注目している。色彩は鮮やかだし、人物は晴れやかな衣装を着ているが、異様に引き伸ばされた身体、ざらざらした家屋、ぼやけた背景の組み合わせは、異なる次元に存在するかのようであり、日常に不気味な亀裂をもたらす。

松田菜優子の絵は、浸透や滲みによって、境界を確定させないイメージを出現させる。向きあう二人の男が、分かりあうコミュニケーションができているのかはわからない。勝手ながら、言葉と情報が大量にあふれているのに、逆に信じられるものが得られないわたしたちの姿をここに重ねた。五十嵐賞に選んだカナイミユも、人物像だが、言葉で固定されないざらつきに注目し、刷りの過程で生じるズレを意図的に組み込む。顔の全体は示されることがなく、世界の片隅でかすかに震えている。大きなうねりになる前の、小さな不安の予兆かもしれない。

他には、Masaki Hagino、星詩奈、奥田誠一、稲葉朗、松浦泰明の作品が印象に残った。

山田聖子 (株式会社アートジャパン代表)

この度、弊社株式会社アートジャパンは創業 30 周年を迎えるにあたり初の公募展を開催いたしました。結果、多彩な表現と高い独創性を備えた作品が数多く寄せられ大変感動いたしました。審査には作品の完成度だけでなく、作家独自の視点や表現力、将来性、継続的な制作活動への期待も含めて総合的な評価を行いました。

最優秀賞に選出された仁田原誠さんの「夢を運ぶ空の下で」は、幼少期の記憶や失われた風景への想いを銅板を切り抜いて箱状の支持体を構成し、その上に油彩を施すという斬新な技法を用いており審査員からも高い評価を集め、満場一致で最優秀賞に選ばれました。郷愁や記憶を題材としながらも、豊かな物語性と表現力によって鑑賞者の心に深く響く作品となったのではないのでしょうか。仁田原さんの作品は以前から拝見しておりましたがぶれずに真摯に制作に取り組む姿勢を見てきただけに今回の受賞を大変喜ばしく感じております。

優秀賞の山内康嗣さんの「追想-MATSUGAURA-ウラボンエ (お盆) 篇」もまた、失われゆく故郷や原風景への記憶をテーマとした作品です。実家の砂を絵具に混ぜ込むという手法によって、記憶そのものを画面に定着させる試みが高く評価されました。鮮やかな色彩の中に漂うノスタルジーや、現実と記憶の境界を揺るがせる独特の表現は、見る者に懐かしさと不思議な余韻を残します。仁田原さんと共通して、過去の時間や場所への眼差しを現代的な感覚で描き出した点が印象的でした。

同じく優秀賞の松田菜優子さんは、綿布にアクリル絵具を浸透させるステイニング技法を用い、にじみや境界の曖昧さを活かした表現で高い評価を得ました。人物同士の関係性や心理的な距離感を繊細に描き出し、言葉では捉えきれない感情や不確かさが表現されています。作品の将来性と作家としての可能性そして今後のさらなる飛躍への期待を込めて優秀賞が贈られました。

また、上記受賞者以外にも魅力的な作品が数多く見られました。その中で佐野健児さんの作品は、独特の画面構成と個性的な表現が生み出す認識の揺らぎや世界観が強く印象に残りました。「絵画作品の持つ、再現性という、一種の虚構とも取れる仕掛けを使って、感覚的な意味での『生きるということのリアリティ』を表現しようと試みている。」と語る佐野さんに今後の展開への期待を込めて、靖山画廊東京賞に選出させていただきました。

今回の受賞作品はいずれも、記憶や時間、人と場所との関係性、そして私たちの認識や感覚そのものに目を向け、それぞれの視点と技法によって表現した力作でした。「人の心に深く響くメッセージ」と「未来を切り拓く感性」を象徴する結果となり、30 周年という節目にふさわしい、これからのアートシーンを担う新たな才能との出会いを感じさせる公募展となりました。

最後になりましたが、本公募展にご応募くださったすべての皆様に心より感謝申し上げます。作品に込められた情熱や探究心に触れることができ、大きな刺激と喜びをいただきました。今後も皆様のさらなるご活躍と創作活動の発展を心より期待しております。

遠山清香 (SEIZAN Gallery NY ディレクター)

レシートや選挙ポスターなど、使用期間が短くすぐに破棄される紙が切り絵をほどこされ、アートとして半永久的な命を得る——谷上さんの作品がもつこの構造に惹かれました。日常的なモノを素材に用いる手法はレディメイド以来脈々と続いていますが、そこに工芸的な手作業を加える点に、日本人作家らしいふるまいを感じます。作品を拝見し、切り絵を用いる現代作家にはどのような人がいるかと調べてみたところ、欧米で広く知られているのは Kara Walker くらい。アートフェアでも切り絵のような作品をたまに見かけますが、いずれも装飾美術的、クラフト的な要素が強い印象です。生活の中に存在する紙に着目し、それがゴミになる一歩手前ですくい上げ、抽象的な模様を彫り込む。その一連の操作によって重層的な意味が立ち上がり、切り絵がクラフトからアートの領域へと引き出されていると思いました。ご自身で切り開かれたこの手法で、今後さらに作家性を深めていかれることにも期待を込めて、ニューヨーク賞に選びました。

作家略歴

最優秀賞

仁田原 誠 / Makoto Nitahara

- 2014 東京藝術大学大学院 修士課程 修了
- 2017 第5回青木繁記念大賞西日本美術展 入選
- 2018 グループ展 (Art Space 金魚空間、台北・台湾)
「カレイドスコープ展」(仙台三越、宮城)
- 2019 個展「音の出ない記憶ノ箱」(しろがね Gallery、東京)
- 2023 個展「僕たちの色」(しろがね Gallery、東京)
- 2024 個展「月夜に浮かぶ物語」(鈴画廊、東京)
「たいせつなもの展」('25) (靖山画廊、東京)
- 2025 個展「星を夢見る」(鈴画廊、東京)
- 2026 「はむびより」(gallery re:tail、東京)
「ART Festival」(仙台三越、宮城)
「春を纏う絵画展」(新潟伊勢丹、新潟)

優秀賞

松田菜優子 / Nayuko Matsuda

- 2002 愛知県生まれ
- 2025 武蔵野美術大学造形学部油画学科油絵専攻 卒業
- 2026 武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース 在学中
- 2022 六花亭製菓主催「二十歳の輪郭」 入選
- 2023 五美大交流展 東京展特別推薦賞
- 2024 「第50回美術の祭典東京展」(東京都美術館、東京)
「FACE展2024」(SOMPO美術館、東京)
FACE展2024 入賞
東京展美術協会主催「第49回美術の祭典東京展」 奨励賞
- 2025 「Incheon Art Show 2025」(aaploit ブース、仁川・韓国)
「キアスム」(aaploit、東京)
- 2026 「第61回昭和会展」(日動画廊、東京)
第61回昭和会展 入選

優秀賞

山内康嗣 / Yasushi Yamauchi

福岡県生まれ。

20代の頃、メディア全般のイラストレーションを手掛けるようになりその後画家に転身し現在、アート作品の展示・販売を精力的に行う。

2004 Free ART Free 2004 日比野克彦選

2016 第18回雪梁舎フィレンツェ賞展 佳作賞
TAGBOAT Independent 審査員特別賞

2020 ART IN THE TIME OF CORONATM 入選

2024 FACE展 2025 入選

2025 個展「山内康嗣展 -公募展の傾向と対策 -」(中和ギャラリー、東京)

「FACE展 2025」(SOMPO美術館、東京)

「八色の森アートビエンナーレ 2025」(池田記念美術館、新潟)

<所蔵> ビゴッジ・コレクション財団、他

審査員特別賞 (山下裕二)

鷲野愛未 / Manami Washino

1992 兵庫県姫路市生まれ。横浜市在住。

2016 東京藝術大学デザイン科 卒業

2018 東京藝術大学大学院 美術研究科 デザイン専攻

空間・設計研究室修了後、寄木彫刻作家として活動する。

<受賞歴>

神奈川県美術展工芸部門 大賞

藝大美術エメラルド賞

東京藝術大学平成芸術賞

MITSUKOSHI×東京藝術大学デザインコンペティションアート&クリエーションデザインアワード オーディエンス賞

台東区長奨励賞

審査員特別賞（五十嵐 卓） 矢島史織 / Shiori Yajima

1979 長野県生まれ

2005 多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻日本画領域修了

2014 The 9th 100 Artists Exhibition 1st Prize

2015 清須市第8回はるひ絵画トリエンナーレ 準大賞・美術館賞
シェル美術賞展 2015 準グランプリ

2016 第5回あさごアートコンペティション 優秀賞

2018 SHIBUYA AWARDS 2018 Arts 部門 渋谷区長賞

2019 第3回宝龍芸術大賞 優秀賞

2022 「FACE 展 2022」(SOMPO 美術館、東京)
FACE 展 2022 優秀賞

2025 個展「ARBOLALIS」(ギャラリー82、長野)
「絵画のゆくえ 2025」(SOMPO 美術館、東京)

<所蔵>清須市はるひ美術館、松本市美術館

審査員特別賞（五十嵐太郎） カナイミユ / Miyu Kanai

1999 年生まれ

2025 東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業

東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻版画研究分野修士課程 在学中

2023 Gallery 美の舎学生選抜展 奨励賞

2024 第42回上野の森美術館大賞展 入選

個展「反復する記憶」(Gallery 美の舎、東京)

2025 「新しい日本画-Japanese Modern-」(GINZASIX Artglorieux
GALLERY of TOKYO、東京)

「俵賞展」(東京藝術大学 YUGA Gallery、東京)

「Your homes hum our songs」(美術愛住館、東京・YUGA
Gallery、東京)

2026 第20回藝大アートプラザ・アートアワード 入選

WHAT CAFE EXHIBITION vol.45 「ON PAPER : Art and
Print Market」(WHAT CAFÉ、東京)

「Five Painters One Origin」(ArtGallery GinzaNovo、東京)

- 靖山画廊 Tokyo 賞 **佐野健児 / Kenji Sano**
- 1990 岐阜県生まれ
 - 2012 武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業

 - 2012 「それぞれ行うテリトリー」(現代 HEIGHTS Gallery DEN、東京)
 - 2014 個展「月から遠くはなれて」(switch point、東京)
「家に帰れば」(AMR、愛知)
 - 2016 「Blink of View」(Gallery Blanka、愛知)
 - 2018 個展「僕にはわからない。」(山下ビル、愛知)
名古屋寺町アートプロジェクト "EMPOWERS"
 - 2019 「オルタナペイント」(名古屋電気文化会館、愛知)
「ART CHECK-IN」(ゲストハウスますきち、愛知)
 - 2022 個展 You will not stay there.」(田口美術、岐阜)
 - 2023 「みのかも annual 2023 -みちくさのもり-」(みのかも文化の森、岐阜)

- 靖山画廊 New York 賞 **谷上ひかる / Hikaru Tanigami**
- 1993 年和歌山県生まれ。佐賀県在住。
- 2022 国際切り絵コンクール 入選
 - 2024 個展 (ギャラリー niinone / 唐津)
 - 2025 第7回刃絵大賞 大賞
ミニマムアート展#1 優秀賞
 - 2026 SAGA ARTIST FAIR 2026 (EDAUME ギャラリー、佐賀)